

一、遺跡の位置と環境

奄美大島東北端の笠利半島は一種の陸繋島をなしている。陸繋部は狭く、その幅 1 km 弱にすぎない。遺跡は笠利半島の基部、すなわちその陸繋部に位置している。地籍は大島郡龍郷町赤尾木字ウフタ 1328-8 である。

奄美大島の地勢は険しく、高い絶壁をもって海に臨む所が多い。汀線は複雑に入りくみ、リアス式海岸を形成している。しかし、笠利半島の地勢は全体的に緩やかで、200 m たらずの低平な山塊が南北に走っている。半島東岸部は特に海岸線がなだらかで砂丘や礁原が著しく発達している。半島西岸部はすなわち笠利湾岸で、大島一般に見られる地形にやや近い。^{注1}

笠利半島東岸は遺跡の密集地として有名である。高又・港などの諸遺跡を擁する宇宿遺跡群を始め、用・アヤマル・下山田などの遺跡が踵を接している。^{注2}^{注3}

これに対して、サウチ・手広などは重要遺跡ながら上の集中域からはずれて位置している。サウチ遺跡は笠利湾岸にあって、弥生文化の伝播を思わせる土器や貝札・磨製石鏃などが出土している。^{注4}手広遺跡は本遺跡南西の太平洋岸にあって、いわゆる面縄西洞式から兼久式土器に至る 6 文化層が累積することで有名である。^{注5}当ウフタ遺跡もこれらの集中域をはずれて立地する遺跡のひとつである。(第 1 図)

笠利半島と本島間の陸繋部には海拔 40 m ほどの丘陵が本島側から半島側へのびている。この丘陵の南縁沿いには南から吹き上げられて形成された砂丘が広がっている。この丘陵は二岐に分かれ、北東方向に開く浅い谷を抱えているが、砂はさらにこの谷を埋め、笠利湾側の砂浜と繋った形になっている。ウフタ遺跡はその谷頭のあたりの砂丘に立地しており、南の太平洋岸から 300 m、笠利湾岸から 500 m のあたりで、高さは海拔 8 m ほどである。

遺跡のある砂丘が本島側から延びているのに対し、笠利半島側にはこれに対峙するような形で海岸段丘が広がっている。その段丘と遺跡側の丘陵とに囲まれて湿地帯が笠利湾へと開いている。海岸段丘に源を発する小川が段丘の端部に沿って湿地帯を流れている。この湿地帯は大正期まで船の出入りできる入り江であったという。その端



第1図 笠利半島付近の遺跡分布図

1. 笠利崎遺跡 2. 用遺跡 3. 第1アヤマル遺跡 4. 第2アヤマル遺跡 5. 土盛遺跡
 6. 宇宿港遺跡 7. 宇宿貝塚 8. 高又遺跡 9. 宇宿小学校遺跡 10. 万屋遺跡 11. 下山田遺跡
 12. 万屋泉川遺跡 13. ケジ遺跡 14. 和野長浜金久遺跡 15. サウチ遺跡 16. 鯨浜遺跡
 17. 立神遺跡 18. 土浜遺跡 19. ヤーヤ遺跡 20. 明神崎遺跡 21. ウフタ遺跡 22. 赤尾木遺跡
 23. 赤尾木保育所遺跡 24. 手広遺跡

から南海岸までの最短距離は僅か 500m にすぎない。南西諸島には幾つかの「船越」があるが、ここは最近まで活用されたその顕著なもののひとつである。(第2図・第3図)

(坂田)

注1. 野田光雄 『琉球列島の地質』日本地方誌 九州地方 1962年

初島住彦 「奄美群島の地形及び地質」

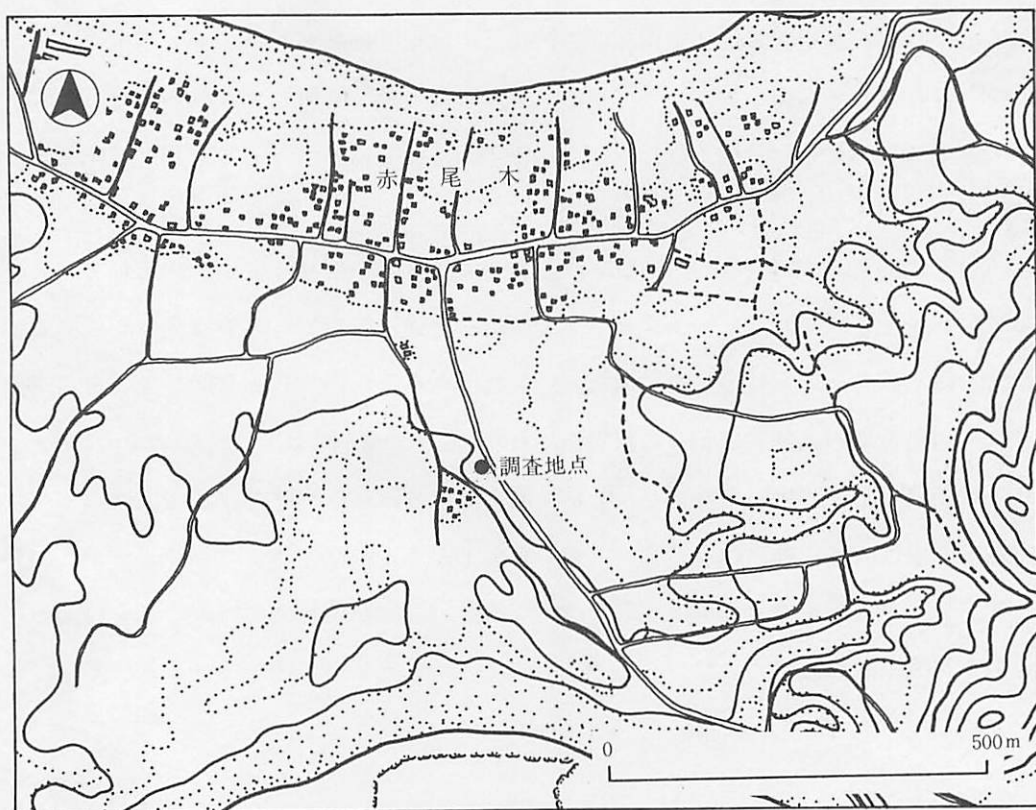
米谷静二 「奄美大島・徳之島の海岸地形」

『奄美群島自然公園予定地基本調査書』鹿児島県 1968年

注2. 九学会連合奄美大島共同調査委員会編『奄美一自然と文化』論文編 1959年

熊本大学考古学研究室 『高又遺跡』 1978年

笠利町教育委員会『宇宿貝塚』 1979年



第2図 調査地点付近の地勢

注3. 河口貞徳 「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』9
1974年

注4. 笠利町教育委員会『サウチ遺跡』 1978年

注5. 龍郷町教育委員会『手広遺跡発掘調査終了報告』 1979年

二、調査の概要

1. 調査の経過（第4図）

発掘現場は採砂作業のために本来の地形が削りとられて、二段の階段状を呈している。下段は遺跡東側の国道と同じ高さまで攪乱をうけ、遺物包含層が露出していた。上段部は平面に整地され、その排土中には掘り起こされた遺物が散見された。

発掘調査は1981年7月21日(火)に開始した。採砂地区を覆うように80×50mの発掘区域を設け、これを南北8区、東西5区の計40区に区切り、10×10mのグリッドを設定した。これに北から南へアルファベット、東から西へ数字を附し、これらを組合せてグリッドの名称とした（第4図）。なお、必要のある場合は各グリッドを田の字形に分割し東から西へa・b・c・dとした。

下段での遺物の包含状況を見るため、D-1、E-1グリッドにそれぞれ2×10mのトレンチを設けた。E-1グリッドでは遺物を追って東側へ発掘部分を拡張し、V層からの掘り込みを検出した。遺物の包含状況を見るため、E-2グリッドを、さらに遺物包含層の連続と広がり状態を見るため、E-3a・d、D-2b・d、D-3a・d各グリッドを掘り下げ、次いで各グリッド第V層下部を3段階に分けて慎重に調査した。遺物取り上げの後、前出の各グリッドを第VI層上面まで掘り下げ、さらにD-1、D-2グリッドを選んで1.5mほど掘り進めてVI層以下が無遺物層であることを確認し、8月4日(火)、調査を終了した。（井上）



第3図 ウフタ遺跡地形実測図

2. 層 序 (第5図)

確認された層はⅠ層からⅥ層まであり、そのうち文化層は黒色砂層(Ⅴ層)のみであった。

発掘区一帯は調査以前に採砂作業が行なわれており、発掘開始時には上部の堆積が削られ、周囲にはそれによる地層の断面が露出していた。Ⅰ層はそのために発掘区では完全に消滅し、他の層も場所によって一部あるいはその全部が消滅しており、攪乱を受けていない層はⅣ層の下部とⅤ層およびⅥ層の上部だけであった。

Ⅴ層はE-2・3、D-2・3の各グリッドで確認され、E-4、D-4およびC-2・3・4にまでおよぶものと思われる。また、上記の断面のうち西・南の各断面にはⅤ層に相当する黒色層が認められた。このⅤ層は東北方向に傾斜する傾向も認められた。他の層もこれと同様な堆積の傾向を示していた。以上のことから判断して、遺跡の立地する砂丘の基盤は浅い谷状の地形であって、Ⅴ層はその谷の開口方向である東北方向に傾斜するものと思われる。

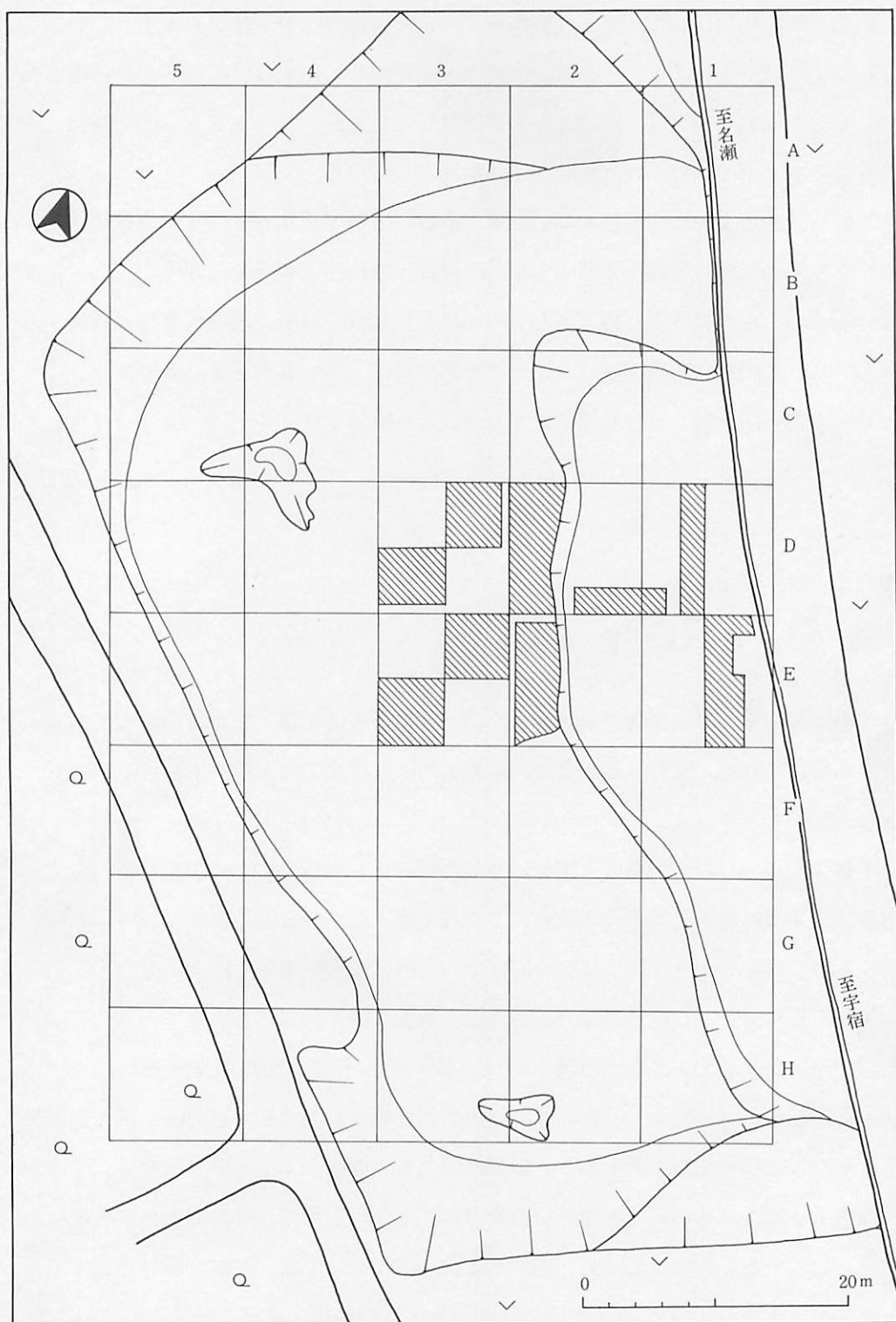
Ⅰ層 本来の表土層であるが、発掘開始時すでに人為的に削平されて消滅していた。

Ⅱ層 厚さ約10~60cmの褐色砂層、粘性はない。木根などを多く含んでいる。D-2グリッドでは本来のⅡ層(Ⅱa)と黒色を呈し粘性が強い層(Ⅱb)と暗褐色を呈し粘性の弱い層(Ⅱc)とに細分できる。Ⅱb・Ⅱc層はⅡa層がさらに攪乱されたもので木根・樹枝などが多数含まれる。Ⅱ層ではキャタピラの痕も検出された。出土遺物には陶磁片・須恵器に類似する土器片および無文土器片などがある。

Ⅲ層 厚さ約5~30cmの暗褐色砂層、ほとんど粘性がない。陸性マイマイを多数含むが人為によるものかどうか確認できなかった。

Ⅳ層 厚さ約10~40cmの淡黄褐色砂層。粘性はない。E-2グリッドⅣ層下部ではD-2グリッドまでおよぶと思われるキャタピラの痕が検出された。Ⅳ層は東北方向に傾斜し、このE区付近で削平されて消滅している。出土遺物は染付のある磁器底部、獣歯、サザエの蓋、自然堆積による陸性マイマイなどがある。

Ⅴ層 厚さ約20~80cmの黒色砂層。粘性を帯び硬くしまった層である。残存した唯一の文化層である。3回にわけてⅤ層を掘り上げ、それぞれ上部・下部・最下部とし



第4図 ウフタ遺跡平面図

て遺物の取り上げを行なった。今回の出土遺物の大部分は最下部に集中する。D—2グリッドではチャートなどの小礫、剥片などが集中して出土し、石鏃一点が検出された。D—1、E—1グリッドではV層が消滅しているが、E—1グリッドの断面にかからない北東隅ではわずかにその最下部が残存していた。

VI層 黄褐色を呈した粘性のない砂層である。E—1グリッドの1号遺構は上部が削平されていてその帰属が不明であるが、砂質・遺物出土状況から判断して本来はV層の最下部からVI層に掘り込まれたものと思われる。VI層中の遺物の有無を確認するためにD—1dとD—2cを深さ約2.5mまで掘り下げ、更に1号遺構のVI層についても1×2mの範囲を掘り下げ無遺物層であることを確認した。(入江)

三、出土遺物

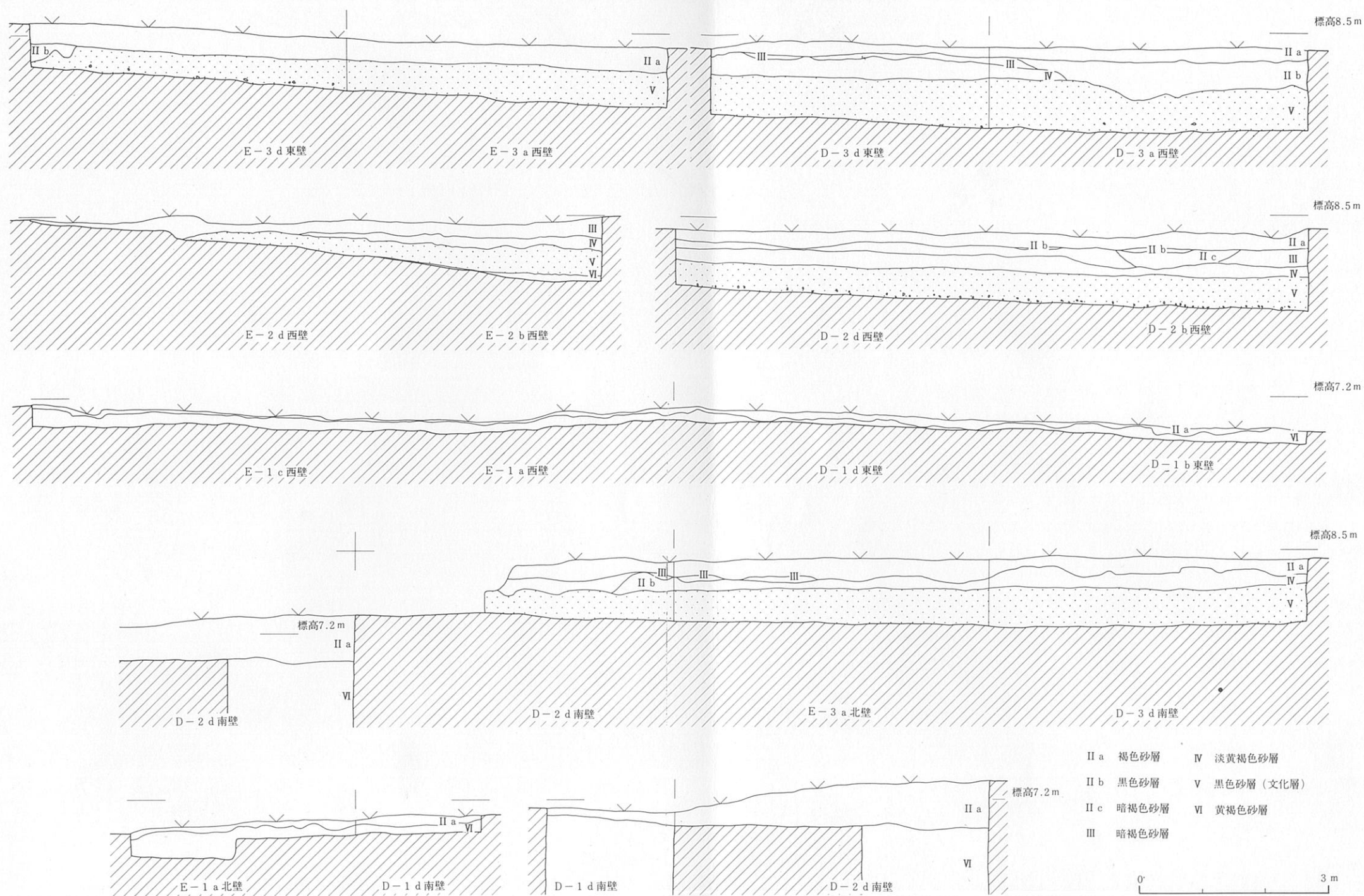
1. 土 器 (第6図～第10図)

土器はII・III・IV・V層から出土したが、その多くはV層下部からの出土である。出土土器は、器形・文様・胎土などの相異よりI～IXまでの9類に大別することができる。

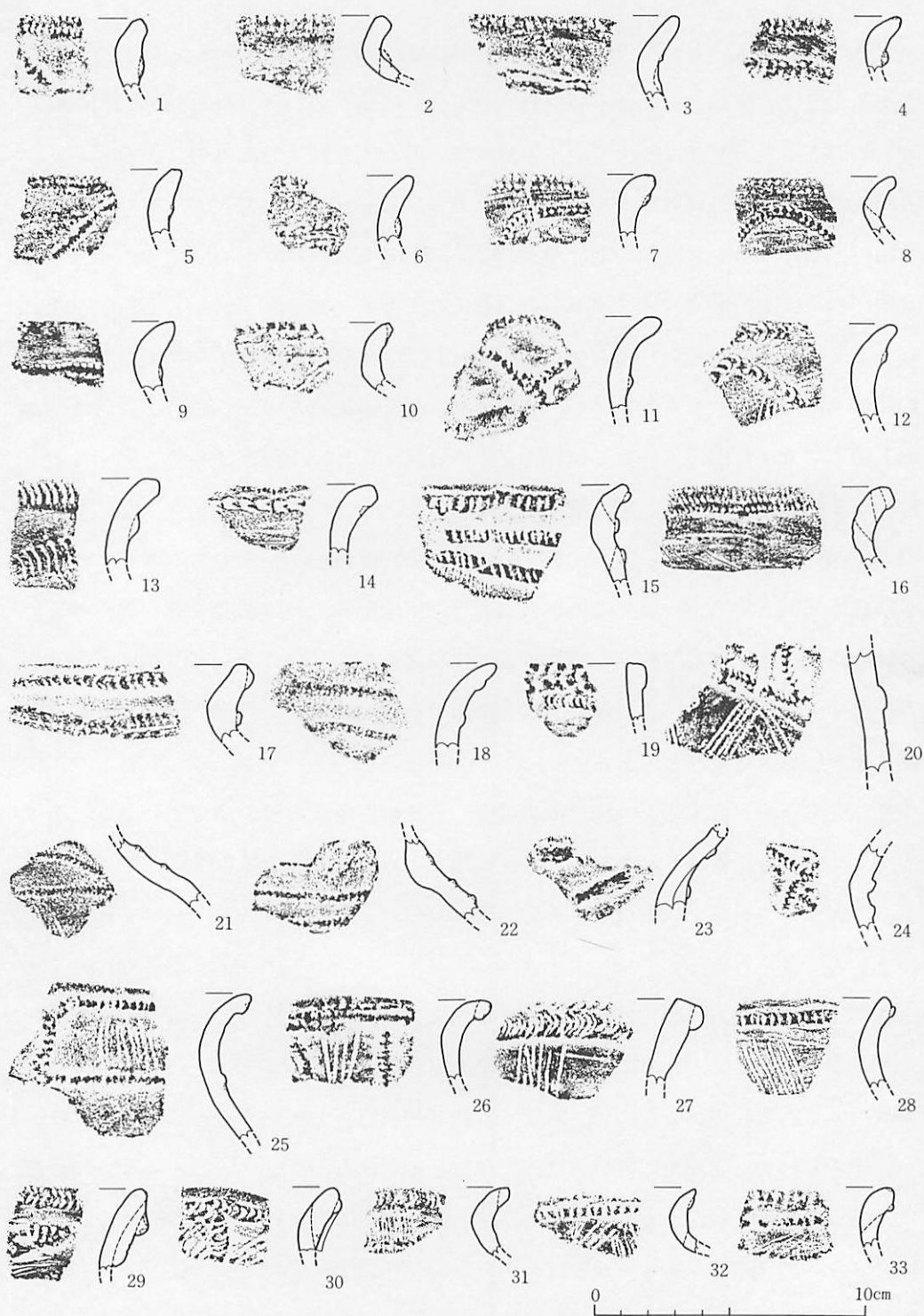
I類(85) 目の太い条痕を縦位に施した胴部をもつもので、85の1点のみである。内器面の条痕に比べて外器面の条痕の方が浅く施されている。胎土は砂質で、雲母の細片を多く含んでいる。焼成はやや良好で、色調は褐色を呈している。

II類(1～61) 口縁部が著しく外反し、胴部の張った深鉢形土器である。口縁部から頸部にかけて1～3条の凸帯を施し、更に胴部下半にかけて数条を一組とする沈線文を施している。また凸帯の間に縦方向の沈線文を施すものもある。色調は赤褐色のものと、黒褐色のものがある。砂質の胎土で、焼成はやや良好である。

口縁下に施される凸帯の形態と、凸帯の間に施される沈線の有無によって次の3つに分けることができる。ただし、胴部および底部については、この分類を布衍することは困難である。II類a(1～13・20・21・24)：口縁部・頸部に波状の貼り付け凸帯を施すものである。凸帯および口唇部には、半裁竹管状の工具による刺突文が連続



第5圖 地層断面圖



第6图 土器实测图(I)

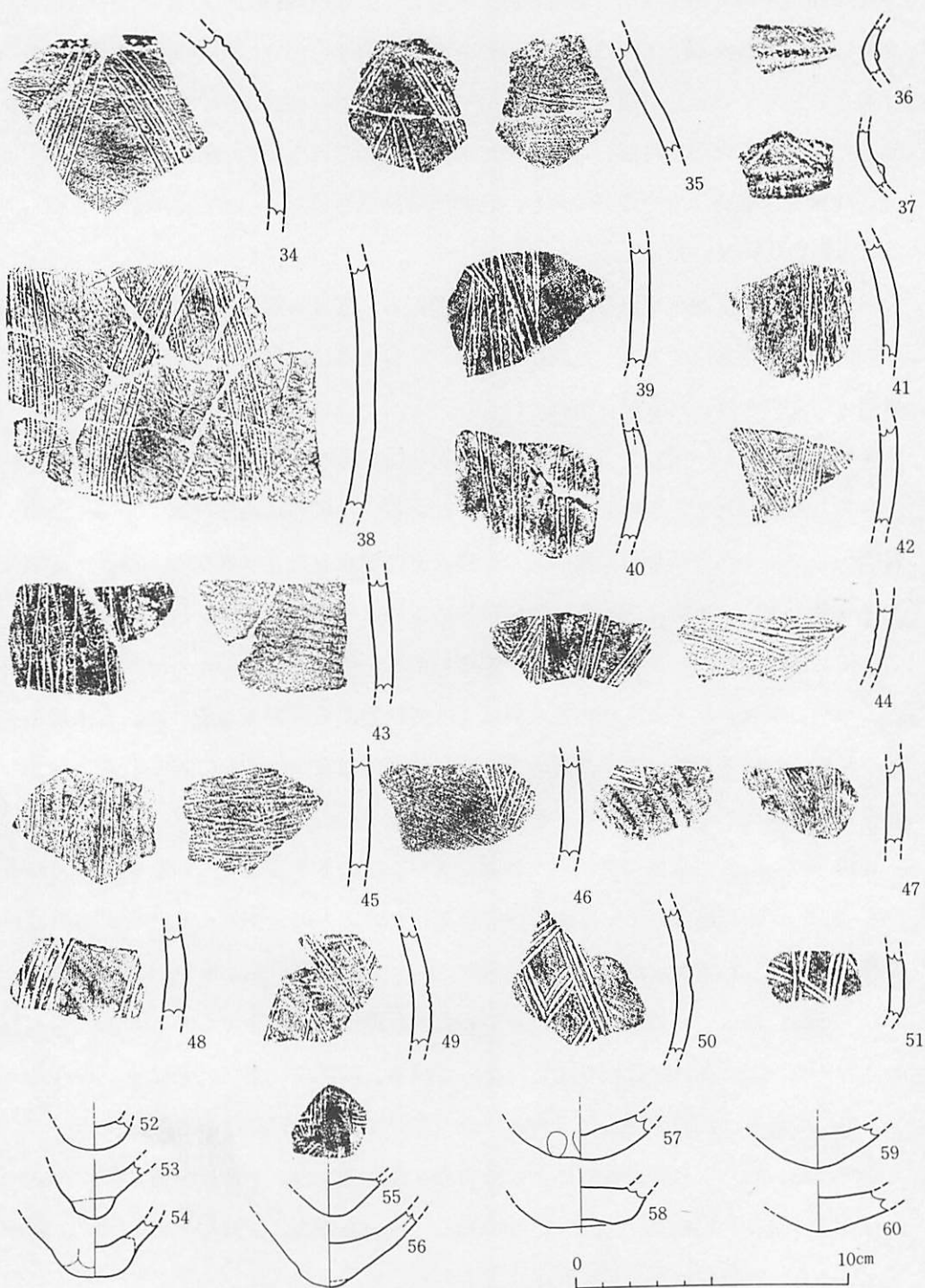
25 : D-1区, 3·18·23·29 : D-2区, 9 : D-2b区, 1·26 : D-2d区, 11 : D-3a区,
20·24 : D-3d区, 4·6·7·12·13·14·15·16·17·21·28·30·33 : E-1区, 5·8
·19 : E-2区, 2·10·22·27·31·32 : E-3a区

的に施されている。Ⅱ類b (15~19・22・61);口縁下に2~3条の横走る凸帯を施したもので、凸帯には刺突文が施されている。15を除いて口唇部にも同様の刺突文がみられる。また凸帯がなく、連続する刺突文のみが施されているもの(14)がある。Ⅱ類bより他類への移行形式であると思われる。Ⅱ類c (25~33・36・37);口縁下に2条の凸帯を巡らし、凸帯の間に数条の縦方向および斜方向の細沈線文を施しているものである。更に凸帯の間に縦方向の凸帯を施すもの(25・26・30)もある。凸帯にはいずれも刺突文が施されており、20・29・33は口唇部にも同様の刺突文が見られる。61は表面採集によるものである。肩部より上部は赤褐色を呈し、肩部より下は黒褐色を呈しスガが付着している。胴部の文様に特色があり、上部だけをジグザグに折り曲げた沈線の束と、ショーブの葉のように先を尖らした沈線の束を交互に配している。Ⅱ類土器の形態で、この種の文様を持つものは、本遺跡が初例であると思われる。

胴部片(34・35・38~54)には縦方向あるいは鋸歯状に斜方向の沈線が施されている。鋸歯状に施された沈線文の間にV状の沈線文を配し、組み合せて菱形状を呈するもの(50・51)もある。この種の文様も類例がない。両面とも貝殻で調整するが、その後にナデを加えたものもある。

底部(56~60)は尖底・丸底ぎみの尖底・平底の各種がある。53はいわゆる乳房状尖底で、54も丸底ぎみではあるが、これに類する。58はⅡ類土器中唯一の平底で、若干上げ底ぎみである。両器面とも貝殻で調整しているものが多いが、ナデで仕上げているもの(52)もある。

Ⅲ類(62~71・82・83) 外器面に鋭利な施文具で沈線文を施しているもので、器形・文様構成の相異により次の3種に細分できる。Ⅲ類a(62・63・65・66・68~71);羽状沈線文を施しているもので、有軸のもの(69~71)と無軸のもの(62・65・66・68)がある。また羽状文に縦位の沈線文を施しているもの(66・71)もある。口縁部は外反するもの(62)と直立するもの(65・66)がある。すべて砂質の胎土で、雲母粒を含むもの(68)もある。焼成はやや良好で、色調は暗褐色(63・66・68・70・71)あるいは褐色(62・65・69)を呈している。Ⅲ類b(64);横位に粗雑な短波線文を施し、貼り付けによって肥厚部を形成する口縁部をもつもので、この一点だけである。



第7图 土器実測図(2)

55 : D-2 d 区, 52 · 59 : D-3 d 区, 34 · 35 · 38 · 39 · 40 · 41 · 42 · 43 · 44 · 45 · 46 · 47 · 48 ·
49 · 50 · 56 · 57 · 58 · 60 : E-1 区, 51 · 54 : E-2 区, 36 · 37 · 53 : E-3 a 区

沖縄県仲泊遺跡で出土したものに類似している。上端を破損しているが、瘤状の突起があったと思われる。泥質の胎土で砂粒を混ざっており、焼成はやや良好である。色調は褐色を呈している。Ⅲ類 c (67) ; 67の1点のみで、縦位の2本の浅い沈線文を施した外反する山形口縁部をもつものである。山形の頂上は3つに刻まれている。胎土は砂質で、焼成はやや良好である。色調は暗褐色を呈している。これによく似たものが面縄第Ⅱ貝塚にある。

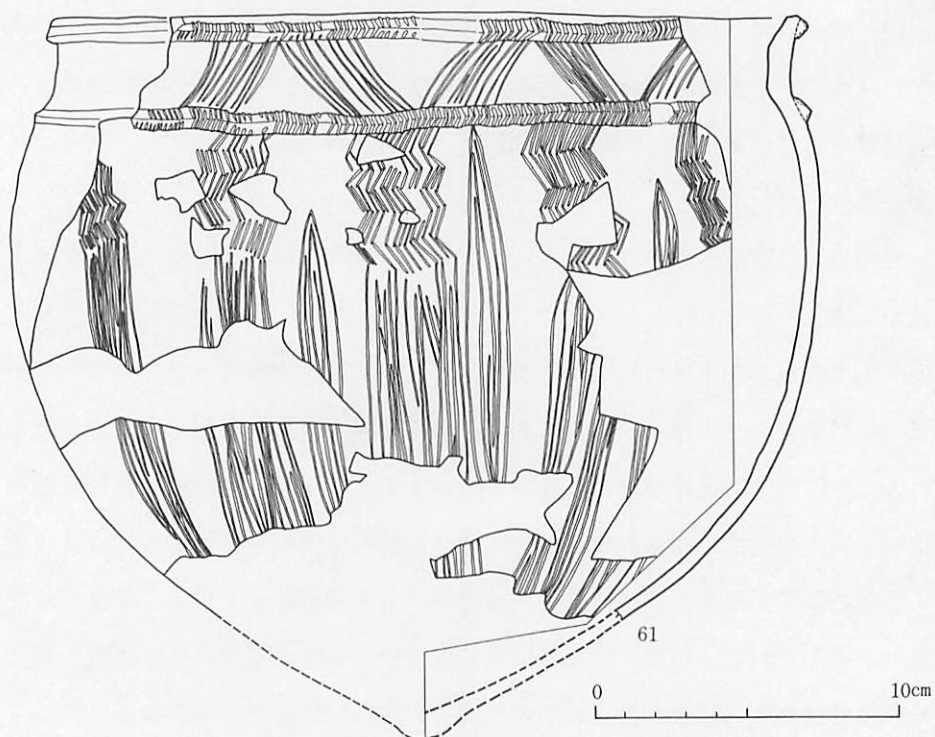
68・87は立ち上がりが急な平底の土器片である。雲母の細片を多く含む砂質の胎土で、焼成はやや良好である。色調は外器面が黒褐色で、内器面が暗褐色を呈している。Ⅲ類 a の底部と思われるが、明確ではない。

Ⅳ類 (72~75) 連点文を有する凸帯と羽状沈線文を施したもので、連点文が一行のもの (72・75) と二列のもの (73・74) がある。75以外は貼り付けによって凸帯を形成しており、75の凸帯の表現は弱く、連点文の形状も他とは異なる。砂質の胎土で、焼成はやや良い。色調は灰褐色 (72~74) あるいは明褐色 (75) を呈している。

Ⅴ類 (76) 76の一点のみで、やや幅広い凸帯を持ち、口縁部が外反するものである。「ハ」字状を呈する叉状の施文具によって口唇部や内器面あるいは凸帯上に刺突文が連続的に施されている。凸帯の下には斜位の沈線文がかすかに見られる。胎土は砂質で、焼成はやや良好である。色調は暗褐色を呈している。

Ⅵ類 (77~84) 粗製の深鉢形土器で、次の2種に分けることができる。Ⅵ類 a (77~81・84) ; 口縁部に1~2条の横線を施しているものと無文のものがある。口縁部の形態は、わずかに内傾するもの (77~81) と外側にひらくもの (79・84) とがある。砂質の胎土で、焼成はやや良好である。色調は褐色を呈するものが多い。Ⅵ類 b (82・83) ; 口縁部には削り出しによって段を、胴部には瘤状の凸帯—いわゆる耳—を施してある。泥質の胎土で、焼成はやや良好である。色調は褐色を呈する。

Ⅶ類 (88・89) Ⅶ類は器形によって次の2種に分けることができる。Ⅶ類 a (88) ; 口縁部が外反する無文の壺形土器で88の一点のみである。両器面ともナデで調整されている。泥質の胎土で、焼成は良好である。色調は明灰褐色を呈している。Ⅶ類 b (89) ; 口縁部が内湾する甕形土器で、89の一点のみである。口縁部にひねり出しによる凸帯を、肩部には貼り付けによる凸帯を施している。両凸帯間は弧状に3本の



第 8 図 土器実測図(3)

61：表面採集品

沈線文が見られるが、器面の風化が激しく、明確ではない。砂質の胎土で、焼成はやや良好である。色調は黄褐色を呈している。

VIII類 (90～99・107・108・112) VIII類は器形によって次の2種に細分できる。VIII類a (90～95); 口縁部が「く」字状に外反する甕形土器である。両面ともナデ調整で仕上げている。砂質の胎土を用いており、粗大な砂粒を含んでいるもの(95)もある。焼成はやや良好で、色調は暗褐色を呈している。VIII類b (96～99); 断面が三角形を呈する数条の貼り付け凸帯を有する壺形土器である。砂質の胎土で、雲母粒を含んでいる。焼成は比較的良く、色調は明赤褐色を呈している。107・108・112は底部片で、平底である。

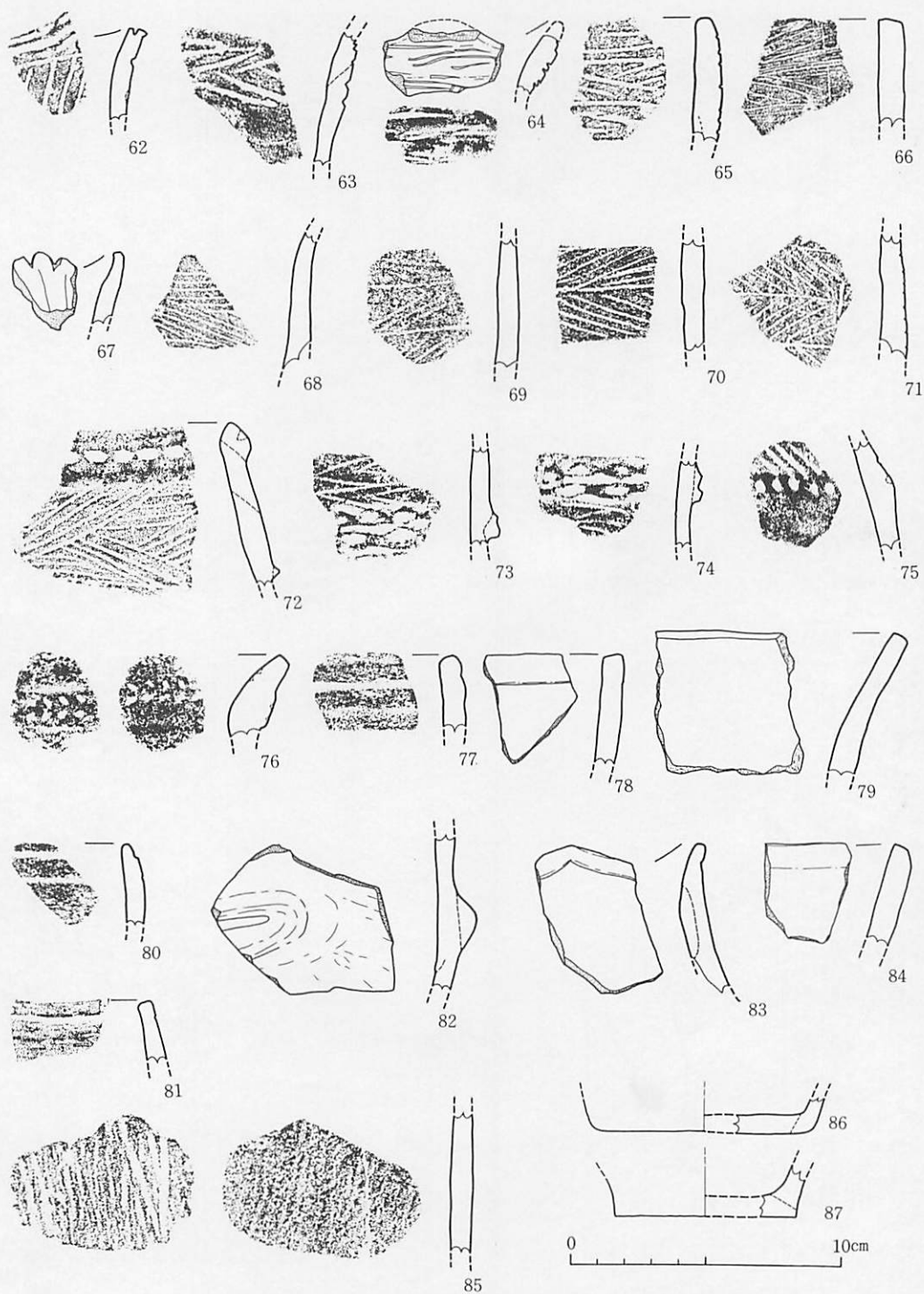
IX類 (100～106・109～111・113～116) IX類は器形によって次の4種に細分できるが、いずれも胎土は砂質で、焼成はやや良好である。IX類a (100～104); 断面が丸味を帯びた数条の貼り付け凸帯を有する壺形土器である。両面ともナデ調整している。色調は暗褐色を呈している。IX類b (106); 外反する口縁部を持つ復元口径8.4cmの小形壺形土器で、色調は明赤褐色を呈している。IX類c (105); 105の一点のみで復元口径20.3cmを測る鉢形土器である。色調は褐色を呈している。IX類d (115・116); 高環形土器である。115は皿状の坏部で、色調は明赤褐色を呈する。116は脚部で、淡い褐色を呈している。

109は突起を持つ胴部片である。暗黄褐色を呈するが、上記のいずれに属するか明確でない。

以上の9類を従来言われている土器グループの名称に当てると、I類—条痕文、II類—面縄前庭式、III類a—嘉徳II式、IV類—面縄西洞式、VII類—夜臼式に比定できる。

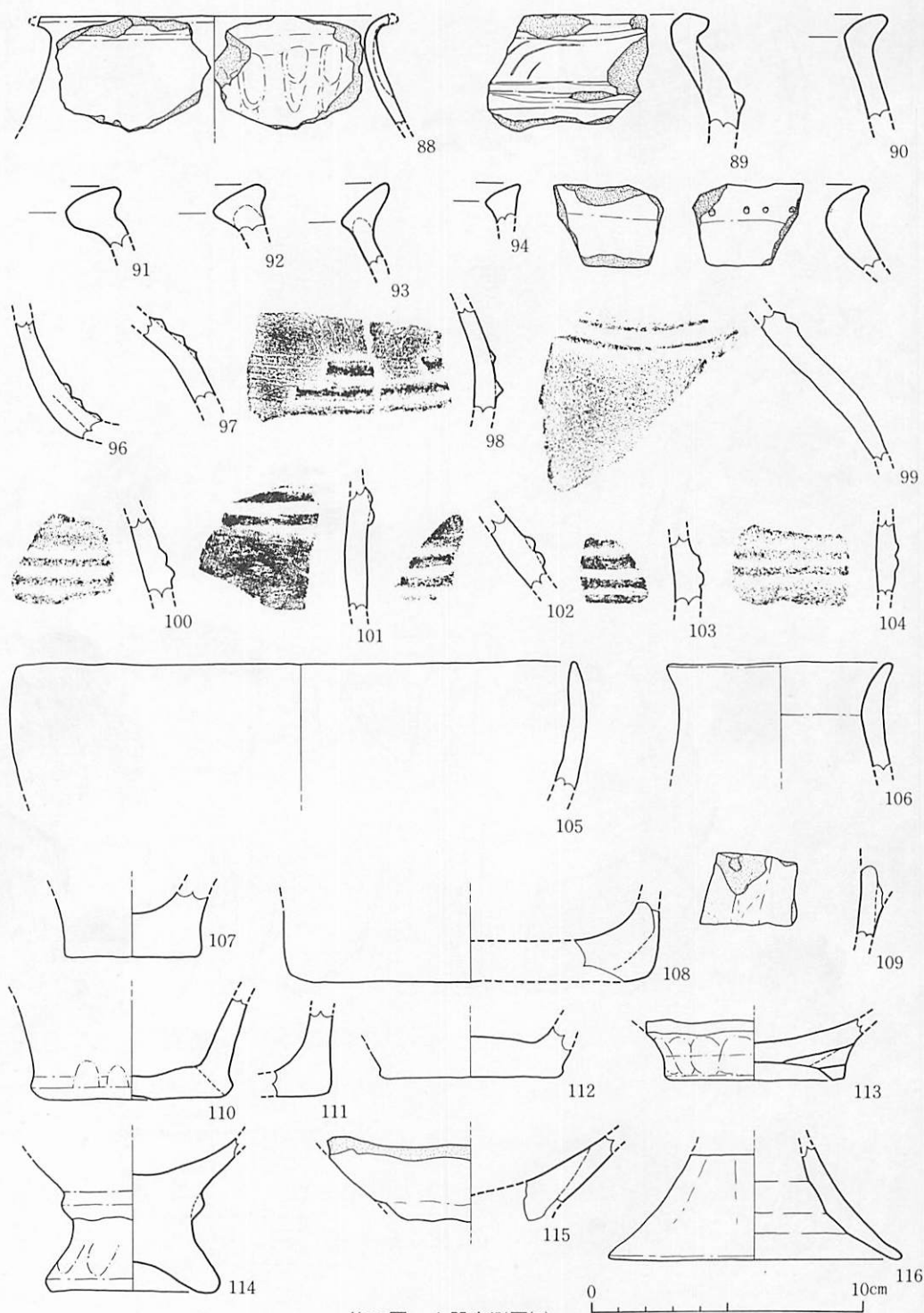
残余のものは、従来特定の名称がないままであるが、VI類—縄文時代晩期後半相当VIII類—弥生時代中期相当、IX類—弥生時代後期相当であると考えられる。III類bは奄美では初見であるが、沖縄では仲泊遺跡等に出土例があり、伊波・萩堂式に近接するものと推定される。III類cは面縄第II貝塚に例があり、嘉徳II式に近いものであろう。V類は内壁施文の様子が従来の宇宿下層式の諸例と異なる点がある。

出土量はII・VIII・IX類のものが大部分を占めている。(米倉・渡辺・平井)



第9図 土器実測図(4)

76・78：E-2区，63・68・77：E-3 a区，69・72・79・84：E-3 d区，73・74：D-2区，
64・75・81・86・87：D-2b区，70・85：D-2 d区，67・80：D-3 a区，62・65・66・71・
82・83：D-3 d区



第10图 土器实测图(5)

106 : D-2区, 88·98·100·104 : D-2b区, 91·93 : D-2d区, 89·90·92·94·95·96·
 ·97·99·110·115·116 : D-3a区, 109·114 : D-3d区, 105·111 : E-2区, 101·102
 ·103·107·112·113 : E-3a区, 108 : E-3d区

2. 石 器 (第11・12・13・14図)

石 斧 (第11図1～10)

全部で27点出土した。石質は凝灰岩・粘板岩・千枚岩・砂岩・デイサイトなどである。完形品はなく、その多くは器体の半ば以上を欠失している。従って分類は困難であり、以下仮りに残欠の形状の類似をたよりに略記する。

第11図1・2・3はいずれも頭部の残欠である。1は凝灰岩製で、他に比べて上端にすばみのある形である。主面・側面ともに磨研され、なめらかである。2は凝灰岩製、3は粘板岩製で、両者とも丸みをおびた形である。表面は磨研されているが、裏面は剝離痕が残り、磨研部は一部にすぎない。頭部及び側面には粗い敲打による調整痕が認められる。

4は、幅が一定した感じで、しかも厚みがあり他に比較して著しく棒状であったと思われる。粘板岩製である。

5・7は、両刃の石斧の破片で、いずれも凝灰岩製である。啄彫の痕はなく、打割して成形し、そのまま磨研したと思われる。5は他に比較して石質がやや軟質でしかも緻密である。両側辺に紐かけのノッチが見受けられ、刃端は厚く、しかもなめらかに磨耗している。各稜も鈍磨が目立ち、不断の持て扱いを想わせる。大形の石斧の欠損品をいわゆる^{注1}鞆形石器に転用したもののようなものである。

6は、凝灰岩製の刃部の残欠、8は、粘板岩製の頭部の残欠である。5・7同様啄彫を経ておらず、いずれもやや小形である。6は粗面を均す程度の軽い磨研が加えられている。裏面は一部磨かれており、使用痕と思われる打ち欠きが数ヶ所認められる。8は裏面が著しく偏平であるので、片刃であった可能性が強い。

上述の資料が全て磨研面を主とし、その間に打割面を残していたのに対し、9には磨研面が見当たらず、10には肩に近い極小部分に磨研の痕跡があるだけである。小形で薄く、これ以上の磨研はかえって石斧としての効用をそこなうと推察される。従って未完成品ではなく、刃部の欠損も使用によるものであろう。いずれも千枚岩製である。

凹 石 (第12図11・12・13)

11・13は、砂岩製で円礫を素材とする。いずれもほぼ中央に敲打による浅い凹みが

認められ、側面に敲打痕を残す。11は背面全体、13は半ば以上を欠損している。12は安山岩製のクガニイシ^{注2}の破片であるが、表裏両面のほぼ中央に浅い凹みがある。稜に擦れの痕が認められるが、ローリングによるものか使用によるものか不明である。

クガニイシ (第12図14・15)

15は、安山岩製で、正面の上方三分の一ほどの部分と、正面及び背面の下部に、啄彫による調整痕が顕著である。ほぼ全面を軽く磨研してあるが、上端の面が特になめらかである。14は砂岩製で背面の半ば以上を欠損している。15ほど平滑ではないが、上部及び下部に啄彫痕が認められ、上端の面が特に滑らかであるので、やや小形のクガニイシの破片であると思われる。

砥石 (第12図16・17)

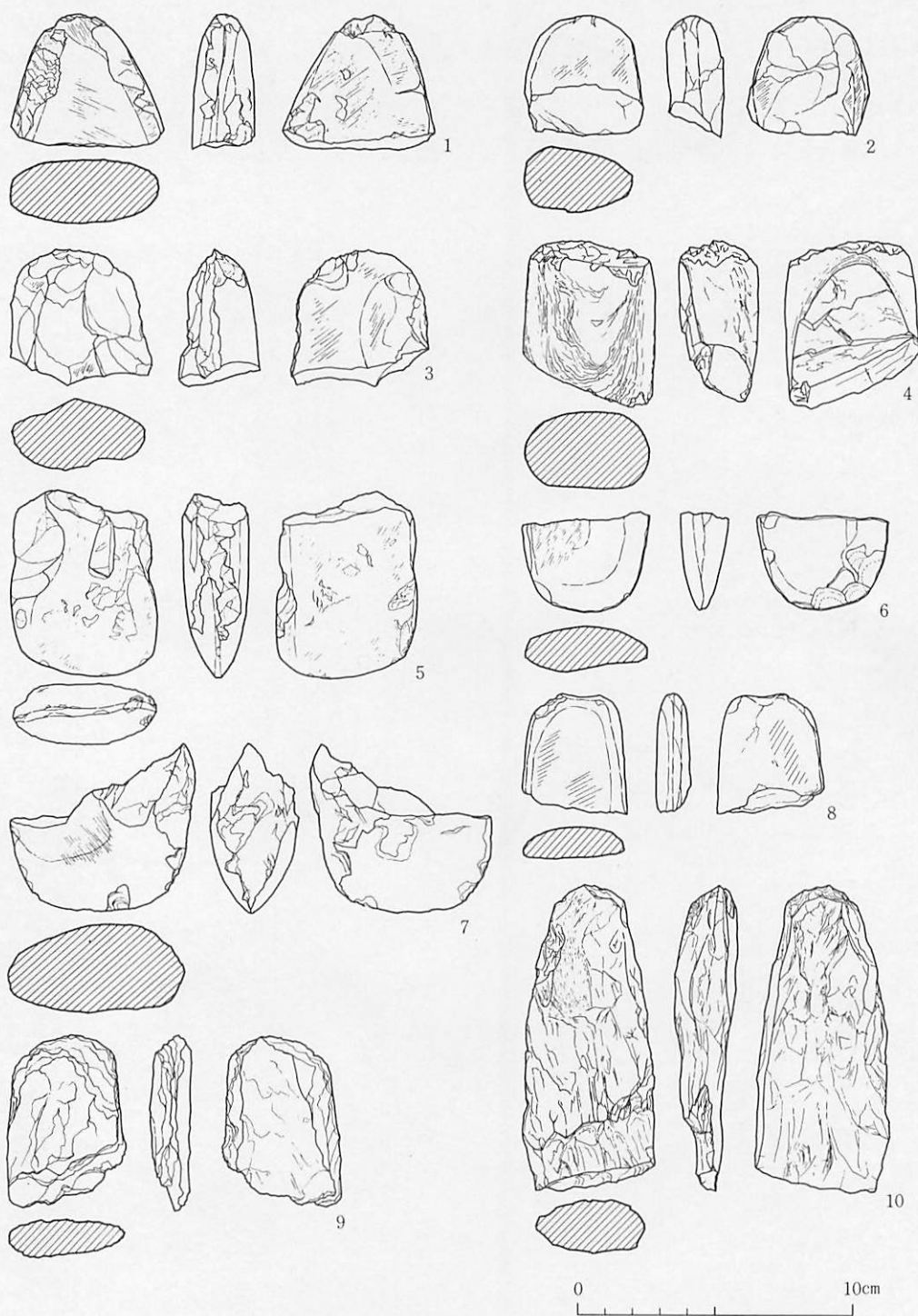
16は、四面ともに使用されたとしく浅く磨り減っている。17は、四面ともに使用されたとと思われるが、一面は破損しており明らかでない。正面には二条の浅い溝状の磨耗痕が認められる。二方とも硬質砂岩製である点から、破損した石皿の転用である可能性が強い。なお、「砥石」としたが、必ずしも刃器の研ぎ出しを考えているわけではない。(武内)

石 鏃 (第13図18・19・20)

3点出土した。本島において打製石鏃は当遺跡の他、手広遺跡で出土している。18はチャート製で、調整剥離は全面に及ぶ。先端は鋭く、基部に浅い抉りを入れる。長さ2.2cm幅1.7cm。2もチャート製であるが、未成品である。調整は略全面に及ぶが、先端部には自然面を残す。基部をやや抉っており、左脚部に比べて右脚部はやや小ぶりである。長さ2.35cm幅2cm。20は黒曜石製の石鏃の脚部であろう。全面に調整痕を残す。18に比して厚みがあり、やや大型の鏃であったと思われる。

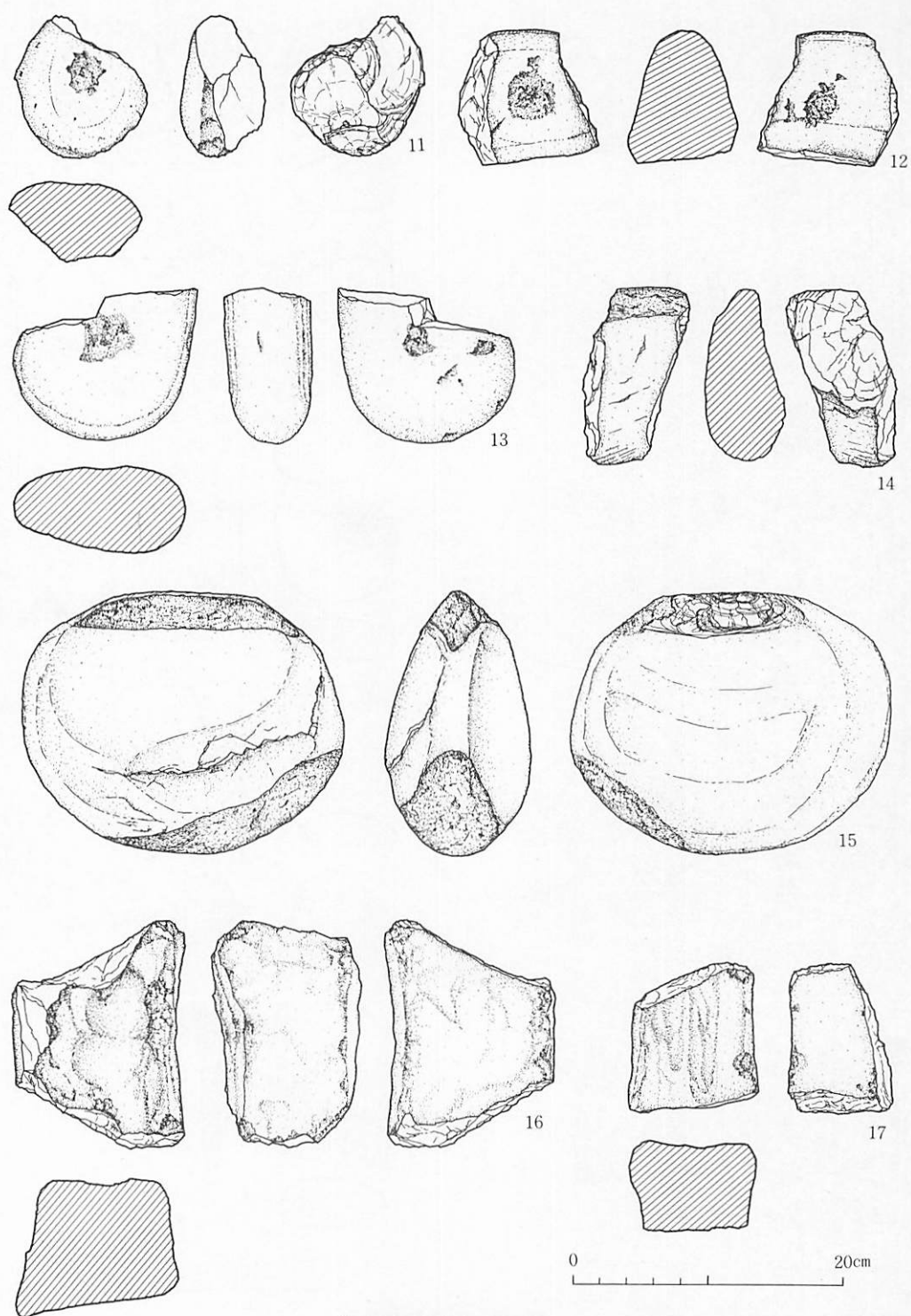
スクレイパー (第13図22～28)

26点出土しているが、その大半が刃部にのみ簡単な調整加工を施したものである。22は凝灰岩製であるが、他と異なり素材に剥片を使用していない。上部につまみ状の凸部を作り出している。全体の剥離は粗く、刃部にのみ入念な加工を施す。裏面に広く自然面を残している。23は粘板岩製。断面菱形の横剥ぎの剥片を用いており、下端と上端に調整痕が見られるが、おそらくは下端を刃部として用いたものであろう。な



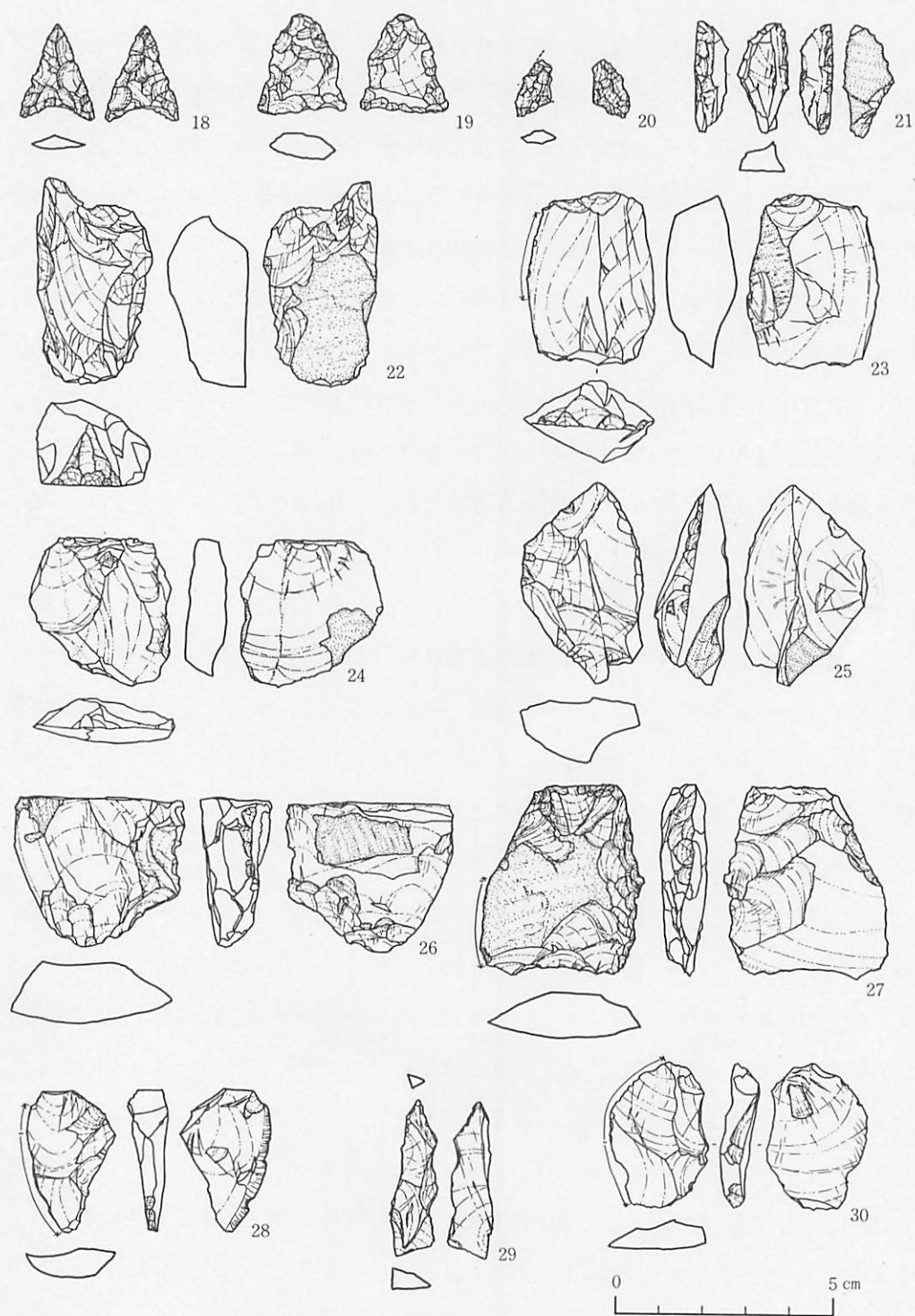
第11图 石器实测图(I)

10 : D-1区, 3 · 6 : D-2区, 2 · 5 : D-3 a区, 4 : D-3 d区, 1 · 7 · 8 · 9 : E-3 a区



第12图 石器实测图(2)

12 : D-2区, 11 : D-3 a区, 14 : D-3 d区, 13 · 15 · 16 · 17 : E-1区



第13図 石器実測図(3)

18・19・21・24・25・26：D-2区，20：D-3a区，22：E-3a区，23・27：E-2区，29：E-1区

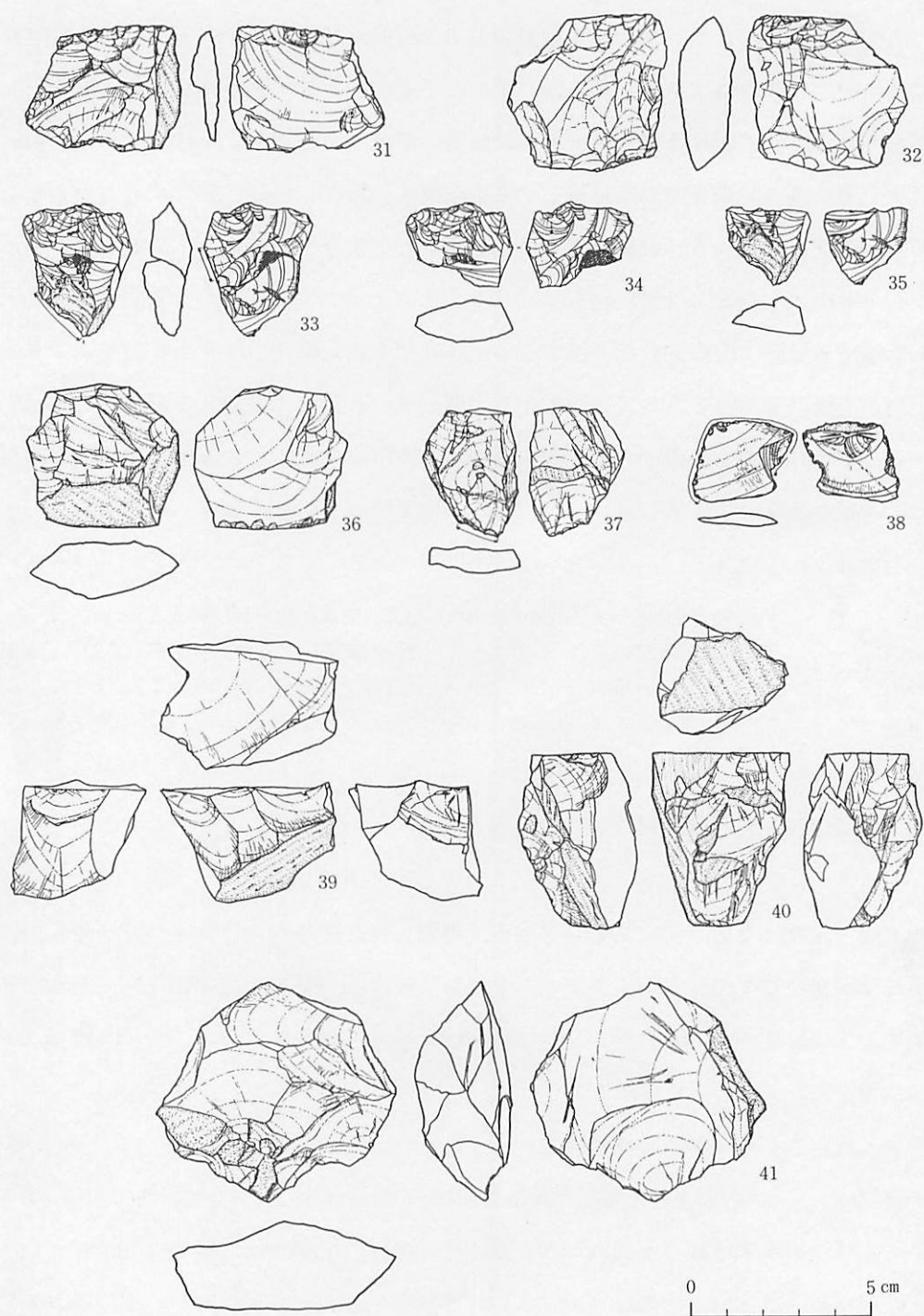
お側縁の一部にも使用痕が残る。24も粘板岩製で、比較的薄い剥片の最も厚みのある縁辺を刃部に利用している。刃部以外はほとんど加工を施さず、刃部の加工も簡単である。25は砂岩製。主要剥離面は横方向からの加撃によるもので、側面に打面を残している。刃部の調整剥離は裏面から加えられている。裏面に自然面を一部残す。26は粘板岩製。上面に自然面を残す厚みのある剥片を利用している。下縁から右側縁にかけて二次加工を施すが、刃部として耐え得るのは右側縁のみであろう。27は凝灰岩製の偏平な剥片を素材にしている。一部自然面を残して二次加工は略全面に及んでいるが、26と同様、刃部は右側縁のみと思われる。また左下の無加工の縁辺部にも使用痕が残る。28は粘板岩製の比較的小型の剥片を素材に用いている。右側縁下部に加工された刃部を有するが、無加工の左側縁にも使用痕が残るのは27と同様である。

楔形石器 （第14図31・32）

剥片を用い、上下両端に加撃痕を有するものを、楔形石器とした。楔形石器は3点得られている。31は粘板岩製の薄い剥片を用いている。使用時の加撃によると思われる剥離痕が略全面を覆っており、使用頻度の高かったことを思わせる。側面には節理面が残る。32は砂岩製で、やや厚みのある剥片である。上端部と下端部に著しい剥離痕が残っており、やはり相当に使用されたものであろう。

使用痕のある剥片 （第13図29、第14図33～38）

明確な調整痕がなく、使用による刃こぼれの見られる剥片は、当遺跡で170点余り出土しており、その占める割合は大きい。以下、代表的なものについて述べる。29はチャート製の縦に細長い剥片である。先端部に残る使用痕から穿孔具としての用途を思わせる。ただし、先端部はさほど鋭利ではない。33は黒曜石製の接合資料である。2ヶ所に使用による刃こぼれが見られる。34はその上半部であるが、折れた面に擦痕が残っており、縁辺部の使用痕も折損した後に施されたと思われる。35はその下半部であるが、折損後に用いられた痕跡は看取できない。36・37は下縁を利用しており、ともに主要剥離面に打点が残らず、あるいは二次加工を受けたものかも知れないが明確ではない。36は凝灰岩製、37はチャート製である。38は黒曜石製。上面に節理面を残す薄い剥片で、下縁以外の凡そ鋭利な縁辺全てを使用している。



第14図 石器実測図(4)

31 : E - 3 d 区, 32・36・37・38・39 : D - 2 区, 34・35・40 : D - 3 a 区, 41 : E - 1 区

石核 (第14図39～41)

石核は5点得られた。39は硅質粘板岩製で、打面調整は施さず、同一打面から加撃して4枚の剥片を得ている。剥片はいずれも不定形である。40は粘板岩製。上面の自然面を打面として剥片を得た後、その剥離面に横方向から加撃した残核である。41は凝灰岩製。側面の節理面から加撃して主要剥離面を形成した後、剥片の周辺から求心的に剥離を行っている。剥離痕はいずれも不定形である。

その他の石器 (第13図21・30)

21は粘板岩製。断面が台形を呈する小型石器である。表面には入念な調整加工を施すが、裏面は自然面である。完器でなく、何らかの石器の残欠である可能性も考えられる。30は砂岩製。裏面に打点を残す剥片で、使用痕を有する。刃部と反対側の縁辺部に簡単な調整加工を施しているが、あるいは「使用痕のある剥片」に含まれるべきものかもしれない。(吉武)

注1. 国分直一 『南島先史時代の研究』 慶友社 1972年

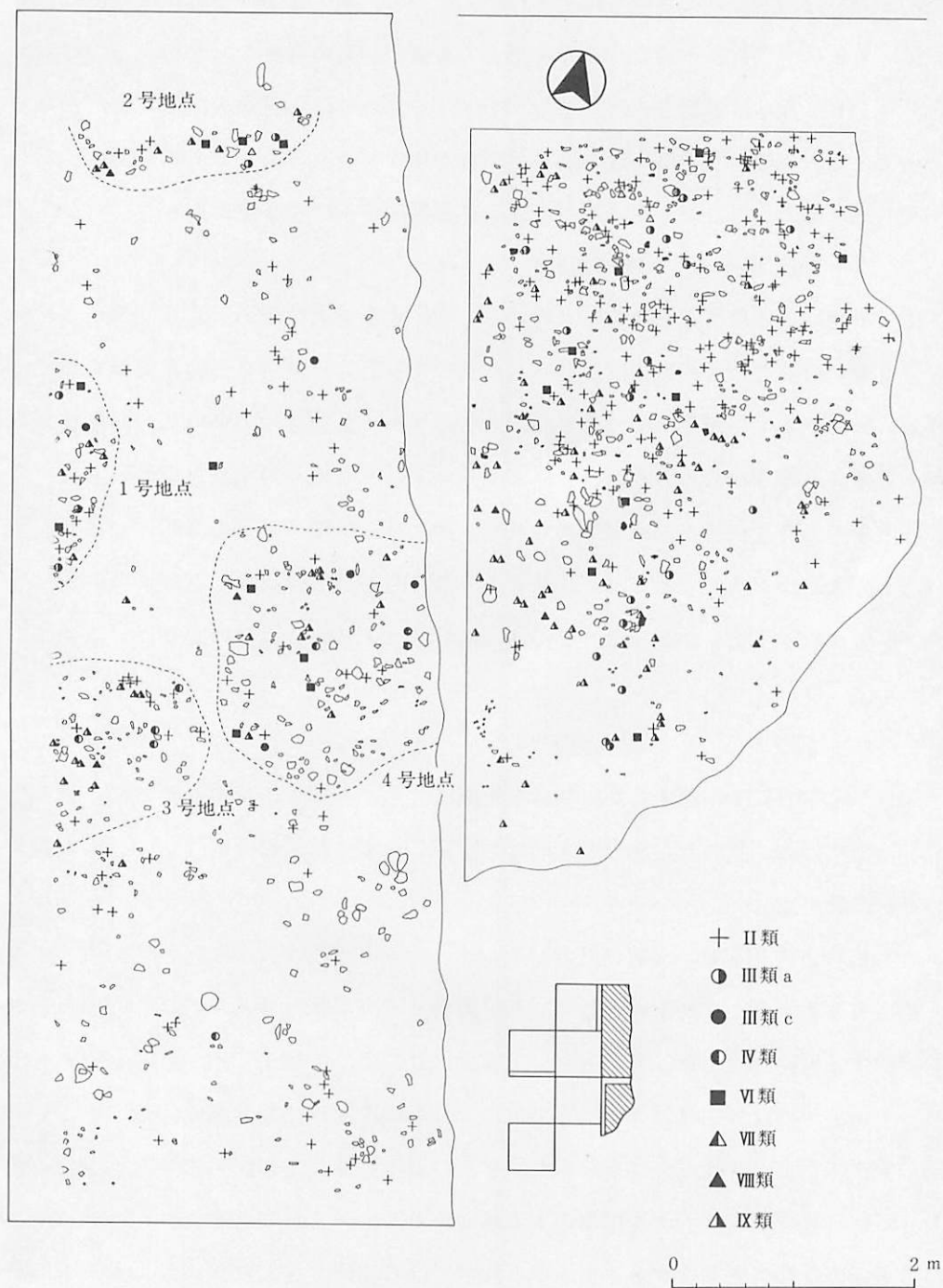
注2. 白木原和美 「クガニイシ」『法文論叢』 第41号 熊本大学法文学会発行 1978年 (「クガニイシ」は仮称であるが、他に適当な名称がないので本書もこれに従った。)

3. 出土状態(遺構を含む) (第15・16・17・18図)

遺構・遺物はV層下部に集中している。打割られた礫や碎片、ローリングを受けた土器片が混在して出土した。各グリッドにおける遺物の分布の様相には、それぞれ下記のような特徴が認められた。なお出土遺物は碎片・礫・土器片のみで、その他の自然遺物などは検出されなかった。

D-2グリッド (第15図左)

遺物はグリッドの西半分に細長く残存するV層下部の全体に分布していた。その中で4ヶ所に特に集中する地点が認められたが、それぞれの広がり 1.5×2 mほどで、いずれも不整形であった。位置はD-2bの西寄り(1号地点)と北寄り(2号地点)、D-2dの北西寄り(3号地点)とグリッド中央部やや北東寄りのあたり(4号地点)である。遺物はいずれも粘板岩の碎片や、剥離痕のある砂岩の礫・石屑で、著しく磨



第15図 遺物出土状態 (左D-2・右E-2)

耗した土器片が混在していた。土器片のうち他に比して出土量の多かったⅡ・Ⅷ・Ⅸ類の土器片は、各地点に亘って検出された。ただし、Ⅷ・Ⅸ類の土器片は上位に、Ⅱ～Ⅳ・Ⅵ類の土器片は下位に片寄って出土する傾向が認められた。なお、この傾向は全グリッドに亘って追認された。また、1・2号地点では小児頭大に割られた礫を多く出土した。3号地点では拳大の礫や黒曜石の剥片が目立った。4号地点ではチャート製の鍬が出土し、しかもその周辺には同じ石質のチップが多量に散在していた。

D-3aグリッド (第16図上)

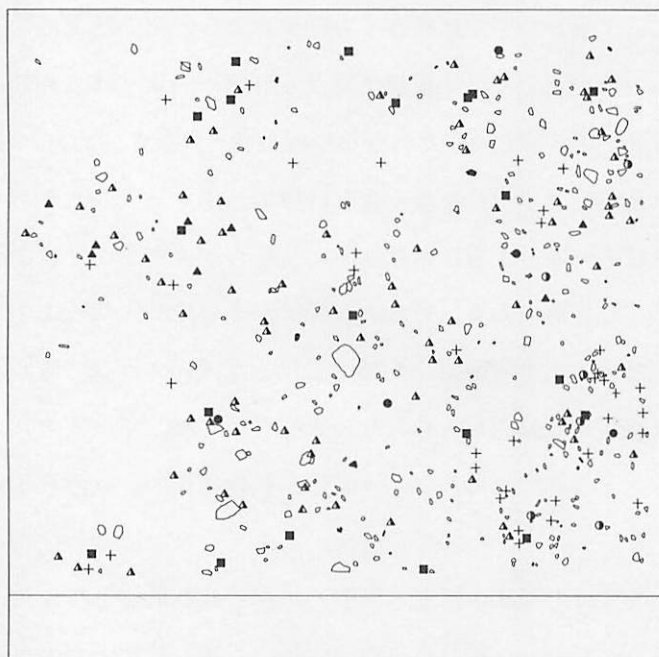
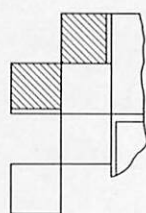
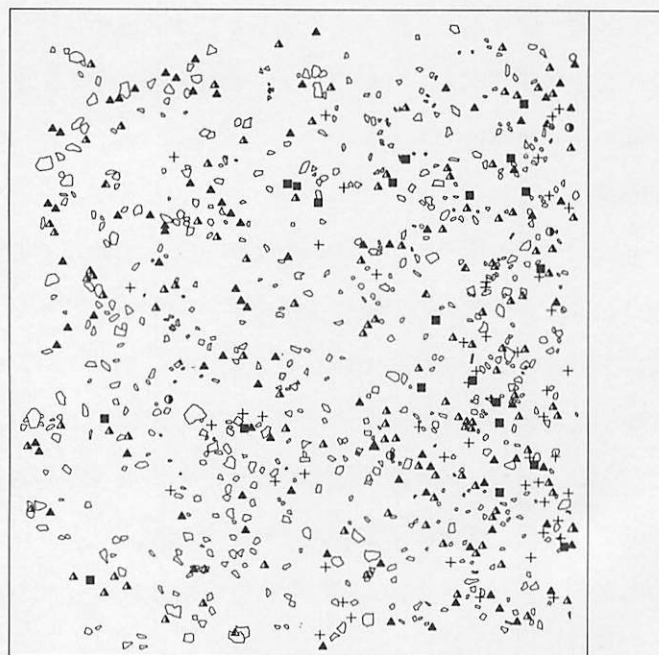
出土遺物は全体に亘って散在し、片寄って集中する地点は認められなかった。ただし、遺物の系統毎に片寄る傾向が認められた。すなわち、東半分、特に東壁寄りに粘板岩の碎片が多く、西半分では小児頭大の礫が多かった。碎片の多い部分にはⅡ・ⅦⅧ・Ⅸ類の土器片が認められた。D-2グリッドの1号地点の延長と思われる広がりにはⅠ類の土器片が伴う傾向が認められた。西半分ではⅧ・Ⅸ類の土器片が多く、他に比して大きめの破片である点が注意を引いた。石器は数点出土したが同じ石質のチップは数点しか出土しなかった。この傾向はD-2・E-2以外のグリッドに共通していた。

D-3dグリッド (第16図下)

遺物は東半分に多く出土した。特に東南隅にⅡ類の土器片が集中していた。この地点では他の部分で見られた小児頭大の礫が認められず、粘板岩の碎片や、砂岩の拳大の石が多数出土した。

E-2グリッド (第15図右)

第Ⅴ層は北半分に細長く残存しており、遺物はその全体に分布していた。その中でも北側ほど遺物の出土量は多かった。土器片はⅡ類よりⅨ類まで出土したが特に出土量の多かったのはⅡ・Ⅸ類の土器片である。Ⅱ類の土器片は北側部分に集中し、その量も他グリッドよりはるかに多かった。また石器はⅡ類の土器片の出土する部分に多く、同じ石質のチップもここに集中する傾向があった。また礫も拳大のものが多かった。南側のⅨ類の土器片が多く出土する部分では石器はほとんど認められず、小児頭大に割られた礫が多く認められた。



- 十 II類
- III類 a
- III類 c
- IV類
- VI類
- ▲ VII類
- ▲ VIII類
- ▲ IX類

0 2 m

第16図 遺物出土状態 (上D-3a・下D-3d)

E-3a グリッド (第17図上)

土器片はⅡ～Ⅸ類まで出土し、礫・碎片など、他のグリッドとほぼ同様の状態であったが、遺物の出土部位に特殊な片寄りがなく、ただ、グリッド東北部に多く出土し東南部ほど少なくなる傾向が認められただけである。

E-3d グリッド (第17図下)

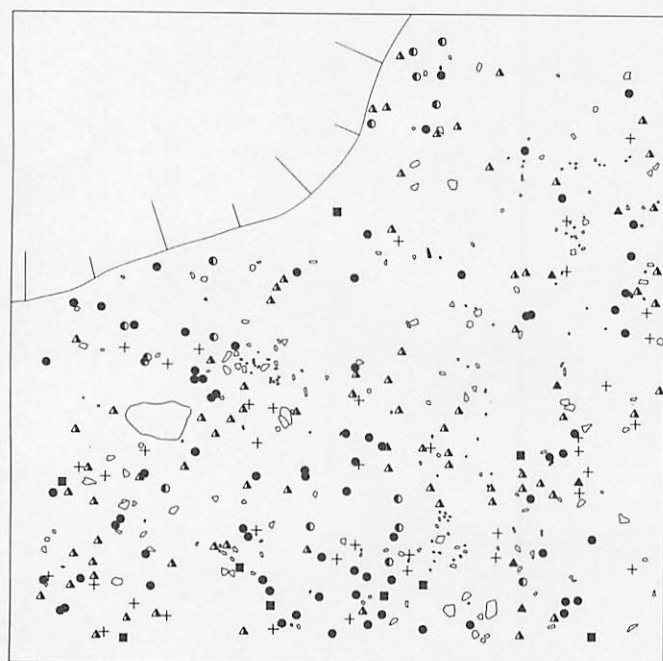
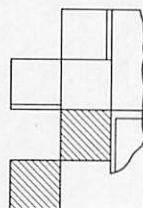
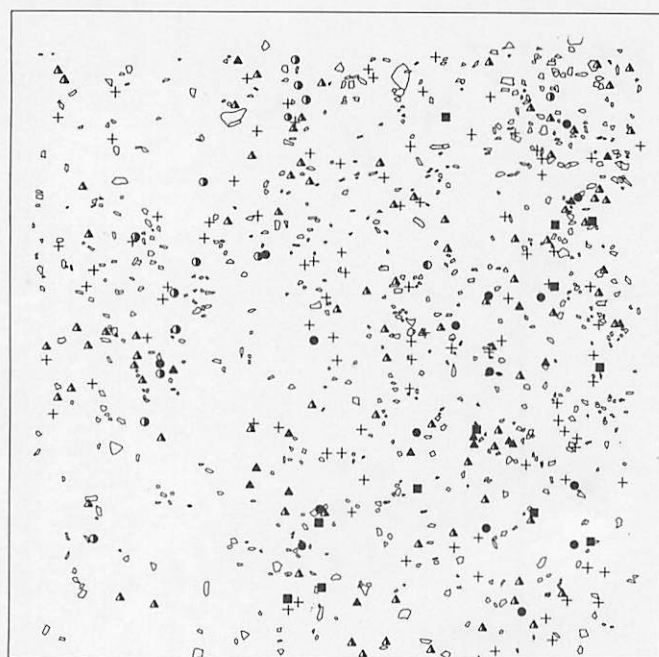
このグリッドでは他グリッドに比べて土器片が多く礫が少なかった。土器片ではⅢ類C・Ⅳ類の土器片が目立った。中でもⅢ類Cの土器片は西南部に向かうほど多く出土した。また、小児頭大の礫、小指大の小石が目についたが、量は多くなかった。小児頭大の礫は全体に散在するが小指大の小石は10数個かたまって3ヶ所に出土した。ここからは土器片は出土しなかった。なお、西北部の推定径5mほどの大きな落ち込みは、散乱する鉄片・形状・伝唱により、爆弾によるものと推定された。

なお、掘り込みの跡がE-1グリッドとD-2dに各1例ずつ検出された。前者を1号遺構、後者を2号遺構とした。

1号遺構 (第18図上)

E-1グリッドの北東隅に、Ⅴ層がわずかに残存する区域があり、その区域内に礫の散在する部分がある。その部分の東よりにⅤ層最下部からⅥ層へのすり鉢状の掘り込みが検出された。東側が国道で切られているため歪な半円形で、大きさは約1.5×1m、深さ約40cmである。掘り込み内は木炭粒を多く含む砂屑で、黒く汚染されており、木炭粒の量の差異で2層に分けられる。上層は掘り込みの肩から30cmのあたりまでで、遺物を含むが木炭粒の比較的少ない層である。残余の約10cmが下層で、木炭粒を多く含むが遺物はみられない。掘り込みの上層西側に火熱で酸化した径10cm前後の礫が、東側にⅡ類土器片がそれぞれ集中する傾向がみられた。火を受けた礫7点・その他の小礫約70点・Ⅱ類b土器片4点・Ⅱ類C土器片1点・Ⅱ類胴部片約120点・底部片1点を採取した。

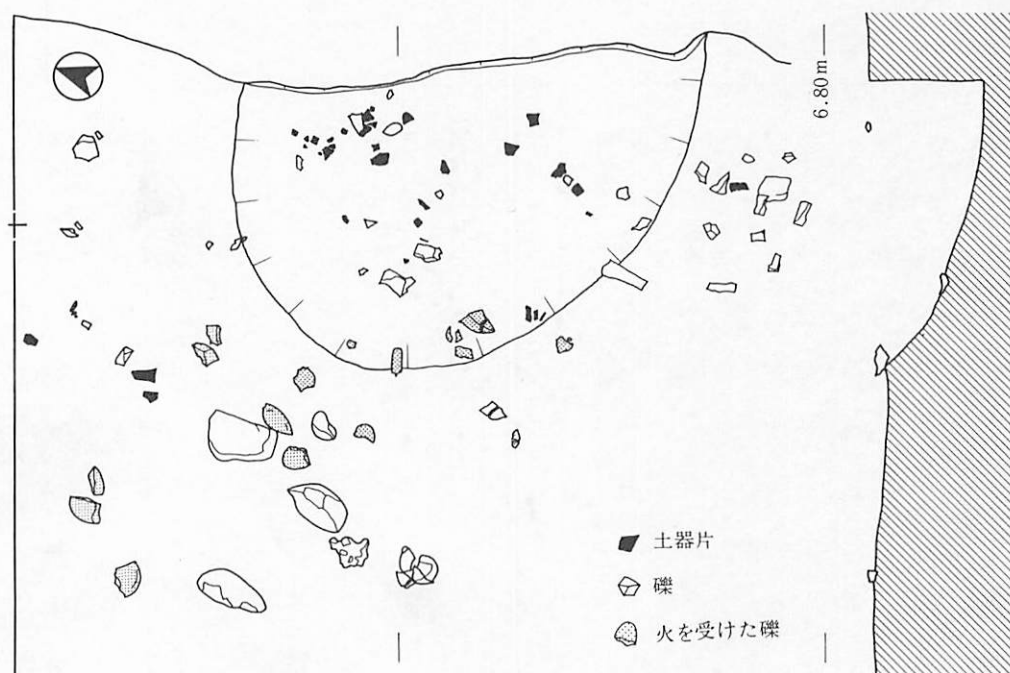
掘り込みの外の北西側に火を受けた径10cmほどの磨石の破片と礫が散在していた。Ⅱ類土器片がその東よりに散在しており、掘り込み内の土器片と同一個体と思われるものもあった。この部分からの遺物は、火を受けた磨石片16点・礫3点・石核石器1点・その他火を受けていない礫20点・Ⅱ類a土器片4点・Ⅱ類b土器片4点・Ⅱ類胴



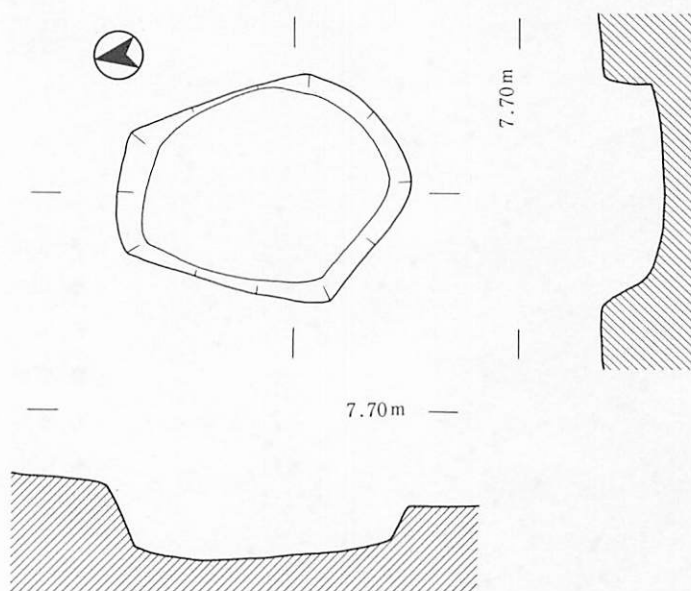
- 十 II類
- III類 a
- III類 c
- IV類
- VI類
- ▲ VII類
- ▲ VIII類
- ▲ IX類

0 2 m

第17図 遺物出土状態 (上E-3a・下E-3d)



1号遺構



2号遺構

0 1 m

第18図 遺構実測図（上1号遺構・下2号遺構）

部片74点・底部片3点である。

掘り込みの南側には径5～10cmの火を受けていない礫22点が散っていたが、土器片は極めて少なく、Ⅱ類胴部片2点にすぎなかった。

2号遺構（第18図下）

D-2d西壁より1m・南壁より3mの位置にあり、平面形は2×1mの楕円形である。長軸の方向は北北西―南南東。Ⅴ層下面より掘り込まれており、深さは約30cmで、出土遺物はⅡ類土器胴部片5点・礫の碎片3点である。（西谷・松田）

四、ま と め

① ウフタ遺跡は東シナ海と太平洋の両方を生活領域に取り込むことの可能な極めて特殊な地点に形成されている。

② 遺跡は砂丘上に営まれているが、嘗て沼沢性の入江であったと推定される前面の低地の北岸には砂が無い。堅固でしかもなだらかな地形で、集落を形成するに足る広がりがある。遺跡の立地になぜ「陰」の地形の、しかも不安定な砂丘側を選んだのか不明である。しかし、重量物の運搬には便宜がありそうである。先史の頃から既に「舟越し」であった可能性があろう。

③ 奄美の先史遺跡は「前面に広い礁原を望み、入江の口を扼しながらしかも清水に事欠かぬ砂丘の上にあり、背後に相当面積の湿原と、その更に背後に広い台地状地形が広がっている」ことが多い。当遺跡は、上記各要件の配列の順序が変わっているが、その要件の全てを備えて成立している。

④ 発掘地点には、時代の混淆する遺物が、かなり濃密に、略均等な状況で広がっており、しかもまとまった遺構がない。従って集落の縁辺部に当るものと思われる。集落の中心か、あるいは中心により近いと推定される部分は遺憾ながら完全に削去されていた。

⑤ 出土した土器は、若干の時期不明のものを除き、縄文時代後期～弥生時代に相当する時期のものである。出土の部位は厚さの薄いひとつの出土層準をなしていたので、この地点乃至この地点の付近に、少なくとも上記の期間中継続して小集落が営な

まれていたものと推定される。

⑥ 遺物を出土する層準の中で、弥生時代相当のグループは比較的上位に、縄文時代相当のグループは比較的下位で出土している。石器や礫に関連するものも上位・下位によって相違があり、上位に礫に関連するものや黒曜石などが多く、下位に粘板岩とチャート素材にした打製石器が多い。

⑦ 遺物を含む層準の下位から出土する打製石器は、類似のものが宇宿高又遺跡・^{注1}渡具知東原遺跡・^{注2}宝島大池遺跡^{注3}などで発見されている。当遺跡について言えば、下位出土土器のうち、Ⅱ類土器（面縄前庭式土器）が圧倒的に多い。また、1号2号の両遺構はⅡ類土器だけを出土し、しかも打製石器を出土する。従って打製石器はⅡ類土器に伴う可能性が極めて強い。これはこの種の打製石器の使用下限が上記一連の遺跡によって推定されていた時期から大幅に降り得ることを示している。

⑧ 遺物を含む層準の上位から出土した打製石鏃及び黒曜石は、同層準のⅥ～Ⅸ類土器（縄文晩期～弥生時代）に伴う可能性が強い。同様の石鏃は、隣接する遺跡である龍郷町手広遺跡^{注4}の縄文晩期に相当すると推定される層位から出土している。また沖繩市室川貝塚^{注5}のチャート製打製石鏃の出土層位は、沖繩中期初頭から中葉に相当すると推定される。具志川市地荒原遺跡^{注6}、糸満市上原遺跡^{注7}、恩納村仲泊遺跡^{注7}などで黒曜石の石屑が確認されたのも略同時期からである。従って当遺跡の石鏃や黒曜石の屑も縄文晩期に相当する可能性が強い。なお、如上のことは黒曜石の移入と打製石鏃との間に強い相関関係があることを物語っている。

⑨ 1号遺構は掘り込み内に木炭粒や土器片を含んでおり、その周辺に拳大～頭大の焼けた礫を伴っていた。掘り込みやその周辺に焼けた礫を持つものは、最近報告例が増しており、大池遺跡^{注3}や具志川島遺跡群^{注8}の岩立遺跡などでも検出されている。調理に関係するものと思われる。前者はやや古く、卵大の焼けた礫を伴うのに対し、後者の該当遺構は同じく面縄前庭式に伴うもので、礫などの様相も相似している。類例の増加を待てば生活の実態にそった有効な分類が可能になろう。

⑩ 夜臼系の土器の出土は南西諸島においては当遺跡が初例である。それに次ぐものの、即ち弥生前期の土器及びその形に拠った土地産の土器はサウチ遺跡^{注9}から出土している。山ノ口式（弥生中期）とその系統以後のものになると、笠利半島で発見例が更

に増加する。この方面と弥生文化との関わり方が具体的に判明するのもそれほど遠いことではあるまい。

以上、本調査に際して特に問題になると思われる点をまとめるとともに、若干の補足を行なった。 (中村)

- 注1. 熊本大学法文学部考古学研究室 「高又遺跡」研究室活動報告3 1979
- 注2. 読谷村教育委員会 「渡具知東原」第1～2次発掘調査報告 読谷村文化財調査報告第3集 1976
- 注3. 国分直一(他) 「鹿児島県トカラ列島宝島大池遺跡発掘調査概報」(文化庁長官宛報告書) 1974
- 注4. 龍郷町教育委員会 「手広遺跡発掘調査終了報告」 1979
- 注5. 沖縄市教育委員会 「室川貝塚」 1973
- 注6. 具志川市教育委員会 「地荒原遺跡・苦増原遺跡」具志川市文化財報告書第3集 1979
- 注7. 恩納村教育委員会 「仲泊遺跡」恩納村文化財調査報告書第1集 1977
- 注8. 伊是名村教育委員会 「具志川島遺跡群—第4次発掘調査報告書—」伊是名村文化財調査報告書第6集 1981
- 注9. 河口貞徳(他) 「サウチ遺跡」『鹿児島考古』第12号 1979